南の光明

The Catholic Diocese of Naha Newsletter

今年の教区の目標

交わり深め 力あわせ
救いのおとずれ広げよう

〒902-0067　那覇市安里3-7-2
カトリック那覇教区本部
TEL.098-863-2020 FAX.098-863-8474
発行人　W.F.バーント司教　1部40円
http://www.naha.catholic.jp/

ウクライナへのロシア軍軍事侵攻の中止を！

昨日（二月二十四日）、日本時間正午、ロシア軍がウクライナ軍事侵攻を開始しました。すでに両軍のみならず、民間人にも死傷者が出ていることが伝えられています。また、ウクライナ国境地帯にはチェルノブイリ原子力発電所があり、ロシア軍に制圧されたとの情報も伝えられ、大変心配です。今後さらに死傷者が増えること、まして核兵器が使用される事態は、何としても防がなければなりません。

ロシアのウクライナ侵攻は、国際法に反します。武力では真の問題解決はありません。戦争によっては、いかなる平和も勝ち取ることはできません。

今日は、今から四十一年前、当時のローマ教皇聖ヨハネ・パウロ二世が、原爆投下から三十六年たった広島で『平和アピール』を発表した記念すべき日に当たります。今一度、そのことばに耳を傾けましょう。

戦争という人間がつくり出す災害の前で、「戦争は不可避なものでも必然でもない」ということをわれわれはみずからに言い聞かせ、繰り返し考えてゆかねばなりません。人類は、自己破壊という運命のもとにあるものではありません。イデオロギー、国家目的の差や、求めるもののくい違いは、戦争や暴力行為のほかの手段をもって解決されねばなりません。人類は、紛争や対立を平和的手段で解決するにふさわしい存在です。

（聖ヨハネ・パウロ二世　広島『平和アピール』一九八一年二月二十五日）

パンデミックや気候変動など、人類が一致して解決せねばならない深刻な問題に直面している二十一世紀の今、軍事力の行使などもってのほかです。日本カトリック正義と平和協議会は、あらゆる武力行使に反対します。ロシアとウクライナの戦争の拡大を一刻も早く止め、被害を最小限にするために、世界中の市民のみなさんに呼びかけます。いますぐ戦争をやめよと声をあげましょう。また、特に世界中の政府関係機関の方々に呼びかけます。軍事同盟による戦争抑止の考えを捨て、対話による平和構築への最大限の努力をして下さい。

二〇二二年二月二十五日

日本カトリック正義と平和協議会
責任司教
ウエイン・バーント司教
委員一同

賛同
社会司教委員会委員長
勝谷太治司教

今年は三月二日の「灰の水曜日」から四旬節が始まります。四旬節とは、復活祭前の準備期間のことです。イエスが荒れ野で四十日間断食をしたことに由来しています。

もともとは復活徹夜祭に洗礼を受ける志願者たちの準備期間として起こりました。教会をあげて復活祭をふさわしく迎えることができるように、祈りと施しと断食に励む習慣が初期の時代から始まっていました。主日は復活の記念日として断食をしない習慣だったので、断食日が実際に四十日になるように、四十六日前の「灰の水曜日」から四旬節を始めるようになりました。現行の規則では、四旬節は、「聖なる過越の三日間」が始まる主の晩餐のタベのミサの前で終わります。

灰の水曜日に教会では、回心のしるしとして頭か額に灰をかける「灰の式」という典礼があります。「灰の式」は、「土から出て土に帰っていく私たちが、四旬節の努めに励み、罪のゆるしを受けて新しいいのちを得、復活されたおん子の姿にあやかることができるように」願って、昨年枝の主日に祝福していただいた、棕櫚（しゅろ）やそてつ、オリーブの枝を燃やした灰を司祭が一人ひとりの額にかける式です。

今年は四旬節の始まる灰の水曜日を、教皇フランシスコは、平和のための特別な断食と祈りの日と定めました。私たち教会は、三月二日の灰の水曜日に、ウクライナにおける平和のために断食を捧げ、心合わせて祈りましょう。

SYNOD on SYNODALITY

As of now, the Synod on Synodality are going on at the Diocesan level here and there across the world. In response to the calling of Pope Francis' initiative to open the Synod with its theme "For a Synodal Church: Communion, Participation, and Mission", the faithful from different walks of life have been joining and journeying together in faith and spirit despite the horrible pandemic.

However, first of all, we should delve deeply on the very foundational matters, i.e, What is a Synod? What is synodality that this Synod is all about? What is the aim of this Synod? Who can participate? What should we do by journeying together in this Synod at the Diocesan level/phase?

The term 'Synod' originates from Greek word '*synodos*', concretely comprising of two affixes that '*syn-*' means 'together', and '*-odos*' means 'exit, journey, walk'. Thus, 'Synod' hereby indicates the path along which the People of God walk together, and has been meant to the General Assembly of the Synod of Bishops. Different Synod held, different theme mentioned. This very Synod has been inaugurated, dwelling on the synodality, which denotes the specific style that qualifies the life of the Church's mission, manifesting her nature as the People of God journeying together and gathering in assembly, summoned by the Lord Jesus in the power of the Holy Spirit to proclaim the Gospel. As notably articulated in *Preparatory Document* (PD), "synodality ought to be expressed in the Church's ordinary way of living and working. In this sense, synodality enables the entire People of God to walk forward together, listening to the Holy Spirit and the Word of God, to participate in the mission of the Church in the communion that Christ establishes between us." (PD,1)

Synodality is not so much an event or a slogan, but a style and a way of being by which the Church lives out her mission in the world, i.e., the entire People of God to be on a faith-journey together, with each member playing his/her crucial role, united with each other. Thereafter, the objective of the current Synod is not to produce more documents, rather to listen, as the entire People of God, to what the Holy Spirit is saying to the Church by listening together to the Word of God in Scripture and the living Tradition of the Church, and then by listening to one another, and especially to those at the margins, discerning the signs of the times. So to say, all the baptized are earnestly called to partake in the Synodal Process (i.e., the Diocesan Phase including meetings of the Episcopal Conferences [October 2021-August 2022], the Continental/Regional Phase [before March 2023], the Assembly of the Synod of Bishops [October 2023 in Rome]), especially at the Diocesan Phase, because the whole Synodal Process aims at nurturing a lived experience of discernment, participation, and co-responsibility, where a diverse variety of gifts is brought together for the Church's mission in the world.

Now, we are all on the Diocesan Phase, which, as the first stage of the Synodal Process, provides the foundation for all the other phases that follow. This phase itself is nothing but an opportunity for all the baptized from each parish to gather, respond to stimulus questions together, listen to each other, and provide individual and group feedback, ideas, reactions, and suggestions; or due to the current pandemic, they can get together by using moderated online discussion groups and various forms of social communication, as well as paper-based or online questionnaires. At a decided time, all of these feedbacks will be compiled as the Diocesan synthesis by a Diocesan Contact Person(s) appointed by the Diocesan Bishop, who is highly recommended to facilitate the Diocesan Pre-Synodal Meeting to culminate the duration of the Diocesan Phase of synodal consultations with parishioners; to celebrate and reflect on the emerging realities and exercise of the diocesan journey of walking together on the synodal path. Then, after a good period of times when the Episcopal conferences and the Continental meetings compile feedbacks that will be received from the diocesan syntheses culminated with different Diocesan Pre-Synodal Meetings, Bishops and auditors will gather with the Holy Father Pope Francis in the Assembly of the Synod of Bishops held in Rome in October 2023 to speak and listen to one another on the basis of the Synodal Process that began at the Diocesan level.

In sum, the current Synod on Synodality composed of its far-extending Synodal Process is not solely a series of exercises that start and stop, but rather a journey of growing truthfully towards the communion and mission that God calls the Church to live out now and then.

Fr. MICHAEL VINH, Pastor of Ishigaki Parish and Naha Diocesan Contact Person on the 16th Synod

For further readings on the current Synod, kindly check these links below:

https://www.synod.va/en/news/preparatory-document.html
https://www.synod.va/en/news/vademecum-for-the-synod-on-synodality.html

2022年2月拡大司祭・助祭ズーム会議議事録

開催日時：2022年2月1日（火）、オミクロン株の感染拡大のため、ズームを活用しての会議となる。

1. 報告及び連絡事項：始めの祈りはウェイン司教が担当。

・前回（1月会議）の議事録の確認を新田が行い、1点訂正して承認を得た。訂正は「シノドス全体会議」ではなく、「シノドス前会議」であることがマイケル神父の指摘により訂正された。

・ウェイン司教より、教区の日について説明が行われた。2月11日の教区の日には、教区が用意したミサ式次第を使って、教区のため、また金祝を迎えられる方々のため、お祈りするよう要請が行われた。ウェイン司教は叙階60周年を迎えられる有馬神父のため主任の古川神父とともに、午前10時から開南でミサを主式される予定であることが報告され、各小教区は、それぞれの小教区の定めた時間で、同じ式次第を用いてミサを捧げて、教区と記念日を迎えられる方々のためお祈りするよう指示された。結婚50周年の方々のために教区が用意したプレゼントは2月2日以降教区事務所で受け取ることができるので、取りに来るよう合わせて要請された。

・新型コロナウィルス対策について、津波古事務局長から報告が行われた。社会活動をすべて停止することはできないので、社会状況を見ながら、1月31日付 NHKニュースオンラインの濃厚接触者の定義などを参考に、常に新しい情報も取り込みながら、パニックになることなく、霊的奉仕を続けて行かれるよう説明が行われた。津波古事務局長の説明を受け、ウェイン司教からも具体的な提言が述べられた。コロナとの付き合いは長期戦が予想されるので、感染予防を徹底しながら、教会を閉めることはしないで、祈りの場を提供できるよう考えて欲しい旨要望があった。

・ウェイン司教の要望を受け、各小教区の現状報告が行われた。概ね変わりなく、教区から示されたガイドラインを守りつつ、主日のミサを2回に分けて密を避けたり、周りへの配慮を忘れないようにしながら感染対策へも気を付けて取り組んでいることが報告された。

・その他

・2月のウェイン司教スケジュールの確認がマーシーさんから行われた。

　　2月6日（日）、石川教会訪問。

　　2月13日（日）、読谷教会訪問。

　　2月14～18日（月～金）司教会議が東京で開かれる。ウェイン司教はズームで参加予定。

　　2月22，23日（火、水）、長崎大司教の着座式に参列。

・ズーム会議の最後に押川司教の挨拶と提言、結びの祈りを頂いて閉式となった。

2022年2月8日（火）臨時ズーム会議

・オミクロン株の急激な感染拡大は落ち着いて来たように見えるものの、尚感染者が300名を超える現状があり、各小教区の状況報告と、教区の方針について説明がウェイン司教から行われた。沖縄県の対応に照らして解除、継続の判断はしていきたいが、司祭たちには日々の検温の実施をお願いしたい。発熱など、感染の疑いがある場合は、ミサを休止して、司教に速やかに報告するなどの対応を徹底するよう要請が行われた。

・3月2日（水）の灰の水曜日に行われる「灰の式」に関して、典礼担当のブイ神父から解説が行われた。「灰の式」は言葉かけと額に指で触れて十字の印をするのではなく、離れた位置で一度だけの言葉かけで、沈黙のうちに頭の上に振りかけて直接触れることを避けるよう要請があった。尚、水曜日に参加ができない方々のため、四旬節第一日曜日（3月6日）のミサの中でも「灰の式」を執り行って良いとの説明も付け加えられた。

・シノドス担当のマイケル神父より、シノドスの分かち合いのため集まることが厳しいとの意見もあるが、ズームの活用や、いくつもの質問を書面にして配って、書面で答えて頂いたりと創意工夫によって、実施して頂きたい。要は、グループの代表者の意見を取りまとめるのではなく、多くの人がそれぞれの意見を直接出し合うことが大切であるので、趣旨を良く理解して協力いただくよう司祭たちに依頼された。

・ウェイン司教からは、コロナ禍の中でもシノドスや新しいミサ式次第など、果たすべき課題が多くあるが、焦らずに良い準備ができるよう取り組んで欲しいとの要請が行われた。

・引き続きウェイン司教から、緊急な事案がなければ、これまで3回にわたり毎週火曜日に開催してきた臨時のズーム会議は今後行わないこととし、次回は3月1日（火）に定例の拡大司祭・助祭会議議を通常対面形式にて安里の教区センターで執り行う予定であることが報告された。また、周囲への配慮から、3回目のワクチン接種を積極的に受けるよう要請が行われた。

2022年2月25日　承認：ウェイン・フランシス・バーント司教　記録：新田　選

ニライカナイ

シノドスについて

マイケル・ヴィン神父
石垣教会主任司祭・那覇教区シノドス連絡担当

皆さんもご存知のように、去る十月十日、バチカン聖ペトロ大聖堂で、「世界代表司教会議（シノドス）第十六回通常総会」の開幕ミサが、教皇フランシスコの司式によって執り行われました。その一週間後、日本教会における各教区、特に那覇教区の開南大聖堂でも、シノドスのミサが捧げられ、シノドス開幕宣言がなされました。今回のシノドスのテーマは、「ともに歩む［＝シノドス的］教会のため－交わり、参加、そして宣教」ですが、皆さんの思いの中にはシノドスに関する質問が、たくさんあふれてきていることと思います。

何よりも、まず「シノドス」とは何でしょうか。そして、シノドスの目的とは何でしょうか。今回のシノドスは前回のものと何が違いますか。

「シノドス」とは「ともに歩む」という意味のギリシア語で、一定時に会合する司教たちの集会のこと、すなわち、世界代表司教会議（ラテン語でSynodus Episcoporum）のことです。このシノドスを通して、教皇様と司教たちとの霊的な兄弟関係を深め、信仰および倫理の擁護と向上、規律の遵守と強化のための助言をもって教皇様を補佐するために開かれます。またそこでは、世界における教会の活動に関する諸問題を検討して研究します。

シノドスでは二〇〇六年に改訂された『シノドス規則』が実施され、提起された問題を討議し、教皇様に意見を具申しますが、決定機関ではありません。

会議に関する権限は、すべて教皇様にあります。会議の招集、代議員の指名・任命、会議要綱の決定、会議の主宰、閉会、延期、解散などは教皇様の権限によって行われます。さらに、シノドスには、通常総会と臨時総会があります。特定地域または複数の地域に直接に関連する問題を取り扱う特別会議が開催されることもあります。また今回のシノドス第十六回通常総会は、一年ではなく二年がかりで行われます。

通常、シノドスが開催される前には、教皇庁シノドス事務総局が、準備文書を各国司教協議会にあらかじめ送付します。この準備文書は「提題解説」（ラテン語でLineamenta）と呼ばれます。シノドス事務総局は、提題解説を各国司教協議会に送り、そこにある質問事項へ回答するよう指示し、そして、各国の司教協議会の「回答」に基づき、シノドス開催前に「討議要綱」（ラテン語でInstrumentum Laboris）を発表します。これが、実際にシノドス会期中に行われる議論の材料となります。このシノドスの議長は教皇様がお務めになります。実際の司会は議長代理が交互に行います。総書記は、分団会・全体会で議論するために、参加者から指摘された議題をまとめて報告します。

また、総書記と特別秘書は、シノドス教父の提言をまとめて、教皇様に提出します。これらの提言を踏まえて、教皇様はシノドス後の使徒的勧告を発表します。

しかし、今回のシノドスは「ともに歩む［＝シノダリティ（シノドス性）またはシノドス的］教会というテーマが強調されますので、やり方と行程表が前回のシノドスと異なります。最終的に、一年後となる、二〇二三年十月のローマでの総会に向け、世界中で準備を進めるという、長いプロセスを歩むこととなります。教皇様による開幕ミサに続いて、各教区でも、昨年十月十七日に開幕ミサが開かれ、今年、二〇二二年五月に向けて、教区での意見聴取が進められます。

その後、二〇二二年七月に日本司教団のまとめ（教区フェーズ）、二〇二三年三月にアジアでのまとめ（大陸フェーズ）、二〇二三年十月にはバチカンでの総会（普遍教会フェーズ）へと進みます。

私たちはいま、教区フェーズの階段を上り始めています。皆さんもご存知のように、教会に委ねられた使命に従って福音をのべ伝える教会の刷新のため、様々な現場で、聖職者、修道者、そして信徒がどのような体験をし、困難に出会い、どのように聖霊に導かれているかという声を世界中から集めていきます。

教皇フランシスコの「世界代表司教会議設立五十周年記念式典における演説（二〇一五年）」により、「シノドス的な教会とは、耳を傾ける教会、信徒、修道者、助祭、司祭、司教、そして教皇が、それぞれ相互に耳を傾け合い、また全員が真理の霊に耳を傾け、霊が私たちに告げていることを理解するものです」と。

それゆえに、各教区での意見聴取の進行においては、「準備文書」三十一項に、その際に参考となる十の領域の質問票が用意されました。しかし、この教区レベルの意見聴取では、これらの質問に対する「回答」を求めているのではありません。このフェーズの目的は、参加者全員が教区における各小教区の現状を振り返り、新たな道を模索することです。質問票はそのための「道しるべ」として使われます。

ですから、那覇教区の信者さんお一人おひとりの心の声、どんな小さな声であっても傾聴し、このシノドスという旅路を通して、私たちの貴重な意見として取りまとめます。そうすることで、誰ひとり置き去りにされることのない教会共同体が実現することでしょう。

（五頁へ続く）

たて軸よこ軸

畑仕事は神様のお導き

真栄原教会　金城キヨ子

去年の八月頃から菜園で野菜作りの手伝いをするようになりました。いつも頂いてばかりで、そのお礼がしたくて畑に通いだしたわけです。折りしも、コロナ感染症の勢いはとどまることなく、かなり変則的な日常生活が続いた日々、コロナ禍の閉塞状況を打破したいという思いもありました。

この広い空間で、作物たちは実に活き活きと私を迎え入れてくれました。成長していく野菜たちに出会う度に、清々しさと生命の力に満ち満ちた「気」を受け取る日々となりました。畑に足を踏み入れ、そこに居るだけで野菜たちの「気」に包まれます。そうすると私は元気になることができました。種まき、植替え、草取り等の作業を通じて野菜の成長する姿を目の当たりにすると、静かな興奮と感動に包まれます。畑仕事の終わりには、その日に採れた野菜を手みやげに、慈しみ深い神への感謝に満たされて帰宅します。

収穫を終えた畑は、すぐに次の野菜の植え付け準備に取り掛かります。耕運機で土を深く掘り返した後に、堆肥を運び入れ、鉄製の熊手（カマサー）で畑の表面にまんべんなく、敷き均します。そして再び耕運機ですき込みます。次いで、種まき、今回はサニーレタスとチシャ菜の「筋蒔き」です。ゴマ粒より小さい種たちを塩抜きした砂と混ぜて手頃な器に準備します。畑に目印となるヒモを張り、手の平に握った「砂種」を親指と人差し指で少しずつ土の表面に落としていきます。すると目に映るのは正に、土の上に残る「砂種」の直線です。蒔き終わると「土になじみますように」と念じながらの水やりです。初めて任された作業でしたが、達成感に満たされ、とても良い気分でした。

さて、種蒔きから十日程で発芽です。芽の出る日を心待ちにしている間、種たちは土の温もりに包まれて、見えない所で地中に向かって根を伸ばしています。その一方、地上では小鳥たち（主にハト）が、種をついばみにやって来ます。少しは許してあげるとしましょう。小鳥たちに全てやられないよう、そして強い日差しや風から苗を守るため、遮光ネットを張りますが、光不足で、もやし状にならないタイミングでネットを取り外さなければなりません。芽が二から三センチ位に伸びた時期を見計らいます。

その後も気象条件に注意して成長を見守りますが、台風などの大風で傷んでも、しっかり回復するしたたかな生命力は感動ものです。

さて、収穫の時期がやって来ました。堆肥と無農薬で育てていますから、とうもろこしやブロッコリー、からし菜等は虫たちと折半ということになります。スウィートコーンの場合、穂先三分の一くらいは蛾の幼虫のごちそうになり、残りは私たちの取り分となります。

また、普段わたし達は見た目の形のきれいな野菜を見慣れていますが、手作り野菜は実にユニークな形をしています。先日採れた大根などは、先端がねじれたり、中割れしたり何とも芸術的で、愛おしくなってしまいます。そして何よりも新鮮で味も格別です。

収穫のもう一つの喜び、それは分かち合いです。私は宜野湾市の、「こんにちは赤ちゃん訪問事業」のボランティアをしていますが、子育て中のお母さんに安心して食べられる野菜を届けると、とても喜んでいただけます。また、気心の知れた方、修道院のシスター方や療養中の方に、ささやかな、お裾分けをさせていただいています。

小さなことですが、人としての喜びと「一粒の種」を与えてくださった神様への感謝の気持ちで満たされます。

私に畑仕事を与えてくださった神様のお導きと、御業の豊かさを感じ、そして、炎天下の畑作業を支えてくれた仲間たちにも感謝と喜びを共有しつつ、日々を過ごしています。

皆さんのご意見や他の取組みなどは、各小教区・各男子女子修道会・各難民司牧共同体で聴取され、まとめられてから、教区シノドス連絡担当司祭に送られます。それを教区で統合し、指定された期限までに日本カトリック司教協議会のシノドス準備担当司教様に那覇教区の意見として提出します。

この一連の行程は、単なる、文章作りのためでも、那覇教区の意見を聞くだけのものでも、シノドスを結論付けて終えることでもありません。むしろ、皆さんの意見を拾い上げ、丁寧に聞き取り集めたものをそのまま、教皇様へお届けすることを真の目的として始まったものです。

教皇フランシスコは「世界代表司教会議第十五回通常総会の開会あいさつ（二〇一八年十月三日）」の中で以下のように明言されています。

「シノドスの目的、したがってこの意見聴取の目的は、文書を作成することではなく、『夢を植え付け、預言と幻を描き、希望を花開かせ、信頼を生み、傷をいやし、ともに関係性を編み、希望の夜明けを目覚めさせ、互いに学び合い、頭脳明晰で機知に富むことを作り出すことは、精神を照らし、心を温め、手に力を与える』（シノドスの準備文書三十二項参照）ということを、わたしたちは思い起こします」と。

日本のカトリック信者の皆様

2022 年「性虐待被害者のための祈りと償いの日」にあたって

いのちを賜物として与えてくださった神を信じるわたしたちには、いのちの尊厳を守る務めがあります。教会の聖職者には、その務めを率先して果たすことが求められるのは言うまでもありません。

残念ながら模範であるはずの聖職者が、いのちの尊厳をないがしろにする行為、とりわけ性虐待という人間の尊厳を辱め蹂躙する行為におよんだ事例が、世界各地で多数報告されています。なかでも保護を必要とする未成年者に対する性虐待という、卑劣な行為を行った聖職者の存在も明らかになっています。日本の教会も例外ではありません。

加えて司教をはじめとした教会の責任者が、聖職者のこうした加害行為を隠蔽した事例が、過去にさかのぼって世界各地で報告されています。

教皇フランシスコは、聖職者によって引き起こされたこの問題に、教会全体が真摯に取り組み、その罪を認め、ゆるしを請い、また被害にあった方々の尊厳の回復のために尽くすよう求めておられます。また特別の祈りの日である「性虐待被害者のための祈りと償いの日」を設けるようにと、各国の司教団に指示をされました。日本の教会では、四旬節・第二金曜日を、この祈りと償いの日と定めました。2022年にあっては、来る3月18日（金）がこの「性虐待被害者のための祈りと償いの日」にあたります。

日本の司教団は、2002 年以来、ガイドラインの制定や、「子どもと女性の権利擁護のためのデスク」の設置など、対応にあたってきました。昨年12月には、「未成年者と弱い立場におかれている成人の保護のためのガイドライン」を作成し、日本の教会に委ねられている未成年者のいのちを守る使命を果たす決意を新たにしています。今後も、よりふさわしい制度とするために、常に見直しと整備を続けてまいります。

いまシノドスの道をともに歩んでいる教会は、互いに耳を傾けあい、支え合いながら、連帯の絆に結ばれた共同体であることを目指しています。日本の教会が、いのちの尊厳を守り抜くための努力を怠らない教会共同体であるように、努めて参ります。

世界中の教会に多くの被害者がおられるといわれます。無関心や隠蔽も含め、教会の罪を認めるとともに、被害を受けられた方々が神のいつくしみの手による癒やしに包まれますように、ともに祈ります。同時に、わたしたち聖職者がこのような罪を繰り返すことのないように、信仰における決意を新たにし、愛のうちに祈り、行動したいと思います。

どうぞ、四旬節第二金曜日に、またはその近くの主日に、教皇様の意向に合わせ、司教団とともに、祈りをささげてくださいますようにお願いいたします。

2022 年 2 月 17 日　日本カトリック司教協議会　会長・菊地　功　大司教

長崎大司教区、ペトロ中村倫明大司教着座（2 月 23 日）

昨年12 月28 日フランシスコ教皇様は、長崎教区の大司教として中村倫明補佐司教様を任命されました。現在全国的にもコロナ感染症第 6 波の拡大下にあり、参列者を制限し、感染防止を徹底した上で、規模を大幅に縮小し、関係者や代表者を制限して、日本の司教団と教皇大使の参列の下、着座式が執り行われました。長崎大司教区第 10 代教区長、ペトロ中村倫明大司教様のためお祈り下さい。

洗礼おめでとうございます

具志川教会
カルメル　大和田　恭輔
二〇二一年十二月二十四日受洗

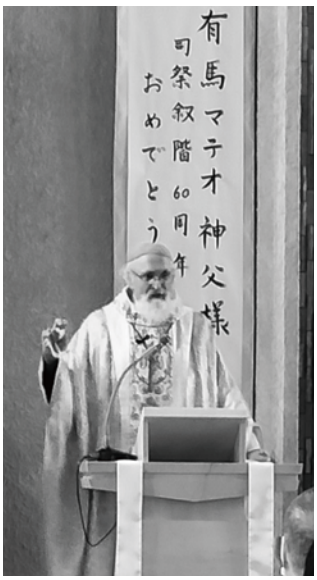
教区NEWS教会

教区の日
有馬神父司祭叙階六十周年
開南教会

去る二月十一日(金)午前十時より、ウェイン司教、古川神父、クレバー神父の共同司式により、教区の日のお祝いと、有馬神父の司祭叙階六十周年祝賀ミサが行われました。

前日までの寒かった曇り空が晴れて暖かくなり、聖堂の中は天の御父の喜びで光輝いているようでした、「今日こそ神が造られた日、喜び歌え、この日を共に！」と。コロナ禍のため、教区の祝賀ミサは各小教区で捧げられることになりました。開南では信徒の金祝対象者はおられませんでしたが、有馬神父が司祭叙階六十周年を迎えられ、ダイヤモンド祝賀となりました。

一九四九年十月、当教会は故フェリックス・レイ司教によって「聖マリアの汚れなき御心」に奉献されました。それは琉球から日本全土を「聖マリアの汚れなき御心」に捧げたパリ外国宣教会の故フォルカード司教の意思を継いでのことでした。そうして一九六二年三月十九日に、有馬神父は郷里の奄美大島、笠利教会において一五〇〇人余の信徒が参列して司祭叙階のお恵みを頂いたことが記録に残されています。第二次世界大戦後、カプチン・フランシスコ修道会ニューヨーク管区から派遣された宣教師達によって琉球での布教が再開されてから、初の教区付き邦人司祭の誕生でした。



開南教会創立五十周年記念誌「かがりび」に、有馬神父は次のように祝辞を寄せられています。

「神様の不思議なお計らい、その豊かな祝福に深く感謝しています。

―中略―

神様の慈しみ深い御眼差しが、まずこの開南の地に注がれました。

―中略―

沖縄の人々に注がれる神様の慈しみ、そのお計らいに、感謝の思いは募るばかりです。」私達は今一度初心に立ち返らなければならないことを、有馬神父から教えられた気がしました。「さあ、始めよう。喜びの感謝のミサの準備を！」コロナ禍の闇があったからこそ、光に気付く事ができました。

それは何と「教区の日」の五日前のことでした。未だ聖歌を歌えない、ミサに与る若者が少ない、有馬神父の体調も不安定でミサに与かれないかも知れない、祝賀会はできないけれど、祝賀会のような晴れやかなミサにしたい・・・、心が熱くなりました。

聖霊が導いてくださったキーワードは「聖マリアの汚れなき御心」でした。有馬神父と言えばマリア様、そしてロザリオがいつも思い起こされます。「教区の日」のミサにはマリア様の賛歌を入れたい。歌えなくても、開南には一流のバイオリニスト、宮良美香さんがおり、ピアニストの大城英明さんもおられる。お二人は喜んでミサ全体の曲を、世界の作曲家のアヴェ・マリアで演奏してくださいました。

ミサ後、長岡悦子さんが、祝賀の舞、日舞「老松」を祭壇の前で舞って下さいました。信徒からワインと花束がプレゼントされ、ウェイン司教様が感謝状をゆっくりと読みはじめると、有馬神父は車椅子から立ち上がって、自らの手で体を支えながら、読み上げる司教様の顔を一心に見上げておられました。その間、アヴェ・マリアがヴァイオリンで演奏され、感謝状が手渡されると、お二人は抱き合い、信徒一同から大きな拍手が沸き上がりました。そしてフィナーレは有馬神父の大好きな「ふる里」を日置清子さんが独唱しました。「志を果たして、いつの日にか帰らん」という歌詞は、奄美、故郷のなつかしい情景が思い起こされるのでしょう。奉献の時に奏でられた「ガリラヤの風かおる丘で」は、聖地巡礼を思い起こす大好きな歌として、有馬神父がリクエストされた曲でした。

当日は有馬神父への感謝とお礼の言葉がけをしたいと、かつての若者たちが沢山集って下さいました。喜びはコロナに勝る！と感じさせた素晴らしい「教区の日」となりました。デオ・グラチアス！

(瑞慶山美登里)

教皇フランシスコ

四 旬 節　教皇メッセージ

親愛なる兄弟姉妹の皆さん、四旬節は、わたしたちが個人としても共同体としても新しくなり、死んで復活されたイエス・キリストの過越に導かれていくのにふさわしい時です。2022 年の四旬節の旅路を歩むにあたって、聖パウロのガラテヤの信徒たちへの勧めについて考えてみるとよいでしょう。「たゆまず善を行いましょう。飽きずに励んでいれば、時が来て、実を刈り取ることになります。ですから、今、時（カイロス）のある間に、すべての人に対して、善を行いましょう」（ガラテヤ 6・9 － 10a）。

― 中略 ―

四旬節は毎年わたしたちに思い起こさせてくれます。「善は、愛、正義、連帯と同じく、一挙に達成されるものではありません。日々勝ち取るべきものです」（『同』11）。ですから、倦むことなく一歩一歩善を行うことができるよう、待ち続ける農夫の忍耐強さ（ヤコブ 5・7 参照）を神に願いましょう。倒れたら、必ず助け起こしてくださる御父に手を伸ばしてください。道に迷い、悪の誘惑に陥ってしまったら、「豊かにゆるしてくださる」（イザヤ 55・7）かたに急いで立ち帰ってください。この回心の時に、神の恵みと教会での交わりに支えを得て、たゆまずよい種を蒔きましょう。断食は地を整え、祈りは地を潤し、愛は地を実らせます。わたしたちは、「飽きずに励んでいれば、時が来て、実を刈り取ることになる」（ガラテヤ 6･9）こと、そして忍耐のたまものによって、わたしたちと他の人の救いのために（一テモテ 4・16 参照）約束されたよいものを受けるということ（ヘブライ 10・36 参照）を、信仰において確信しています。すべての人に対する兄弟愛の実践によって、わたしたちのために死んでくださった（二コリント 5・14 － 15 参照）キリストと結ばれ、神が「すべてにおいてすべて」（一コリント 15・28）となられる天のみ国の喜びを待ち望むのです。その胎より救い主がお生まれになられたかた、すべてを「心に納めて、思い巡ら」されたかた（ルカ 2・19）、おとめマリアに願います。わたしたちが忍耐のたまものを授かれるよう、執り成してください。わたしたちの母として寄り添ってください。そしてこの回心の時が、永遠の救いの実りをもたらすものとなりますように。

訃報

◆具志川教会
マリア　山田　美保子　様
二〇二一年十二月一日帰天
享年八十七歳

◆与那原教会
マリア　城間　シゲ　様
二〇二一年二月七日帰天
享年八十一歳

マリア　多和田　キミ子　様
二〇二一年二月二十一日帰天
享年八十二歳

NPO 法人ぶどう園の会
訪問看護ステーション クララ
TEL&FAX:098-937-5001
住所　沖縄市泡瀬2丁目37-15
・基本受付　月曜日～金曜日（申込、相談など）
・営業時間　8:30～17:30
・営 業 日　24時間365日（緊急対応含む）

葬祭の「やすらい企画」
私たちは故人とご遺族の意向を最優先に考えます。何でもご相談下さい。
那覇市首里鳥堀町4-57-3
TEL&FAX:098-885-8205
http://w1.nirai.ne.jp/yasurai
E-mail:yasurai@nirai.ne.jp
24時間受付

～ご遺族の心をもって奉仕する～
葬典社（そうてんしゃ）
＊創業30数余年・・・。
＊皆様に支えられ「感謝」とともに人生を閉じるためのお手伝いをさせていただいております。
＊ご質問、ご相談、24時間、いつでもお電話下さい。
「ゆうなの会」会員募集中です。
（実務担当）比嘉（ひが）　高茂（たかしげ）
24時間受付
☎098-853-1059（てんごく）